

学級通信を介した友人関係の深まりに関する事例的研究 －児童の良さを伝える学級通信に着目して－

小 板 篤 史*・赤 坂 真 二**
(平成29年8月31日受付；平成29年10月31日受理)

要 旨

本研究では、小学校において、児童の良さを伝える学級通信を継続的に発行することで、児童の行動に変化が見られ、友人関係にも良い効果が表れるようになることを明らかにすることを目的とした。日常的な子ども同士の肯定的なメッセージ交換の実施に加え、児童の良いところを紹介する学級通信を発行することで、紹介された良い行動をする児童が学級内で顕著に増加した。変容の要因として、児童相互の認め合う関係が構築されたことと、学級目標の達成に向かう意識が児童の中に構築されたことの影響が示唆された。また、協力して行動するなど、児童間の関わりが増加し、友人関係が深まったことが示唆された。学級通信を発行する意義として、新たに「子ども同士の信頼関係」の構築の効果があることが示唆された。

KEY WORDS

学級通信 児童の良さ 友人関係 学級目標

1 問題の所在と目的

小学校学習指導要領では、総則の第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として、「(3)日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること」が述べられている⁽¹⁾。また、平成28年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の結果、「自分には、よいところがあると思いますか」の質問項目に対して、「当てはまる」と回答した全国の公立小学校の児童は36.2%と低く、自分の良さを認められない児童が多い現状が明らかとなった⁽²⁾。このことから、児童が自身の良さを認められるような、承認感を高める学級経営上の取組が必要であるといえる。

学級経営の充実に関して、成井(2011)は、「学級集団の育成においては、学級経営方針に対する児童・保護者の理解・協力が欠かせない」として、学級通信の有効性を示している。さらに、「学級集団を育成する上での課題を学級担任に気付かせ、改善の方法を示唆する働きもあります」と述べていることから、学級経営の充実の効果のある多くの取組の中でも、特に学級通信には、児童・保護者との関連や、教師への気づきの促進にその独自性があることが分かる⁽³⁾。では、学級通信は、学級経営の充実に具体的にどのように関与しているのだろうか。

教師と生徒の信頼関係について、中井・庄司(2009)は、「教師からの受容経験」「教師からの承認経験」「教師との親密な関わり経験」を有する生徒の、教師に対する信頼感の得点が高い傾向にあることを明らかにしている⁽⁴⁾。また、山本・赤坂(2016)は、学校環境適応感尺度「アセス」の対人的適応得点と、学級通信の変容の関連性の分析から、学級通信など、日常的な、教師からの適切な称賛や承認、価値付けを継続して行うことが、教師と生徒の良好な人間関係の構築に有効であることを示唆している⁽⁵⁾。つまり、「教師から承認されている」という意識を子どもに抱かせることが、教師と子どもの良好な人間関係づくりにおいて重要であるといえる。

また、鈴木(2012)は、教師に対する質問紙調査の結果、学級通信を出して良かったこととして、「教師自身の成長」の回答が最多であったことを報告しており、深見・津田(2015)は、学級通信を活用した省察が教師の指導力の向上に有効であったことを示している⁽⁶⁾⁽⁷⁾。これらのことから、教師の力量形成に、学級通信が作用していることが分かる。

学級通信が教師の力量形成に影響する要因として、小倉(1989)は、学級通信を書くためには、「教師が生徒の良さをいろいろな角度から探していかなければならない」と述べ、成井(2011)は、「学級通信のネタを求めてアンテナを張り巡らすことは、児童と共に過ごす中で一人一人の個性を認めるきめ細やかな児童観察力を身に付けることになり、児童理解を確かなものにしていくことができる」と述べている⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

*米子市立義方小学校 **学校教育学系

学級通信を発行することの意義として、吉川(2004)では、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」の3点が挙げられている⁽¹⁰⁾。しかし、これらはすべて、教師にとっての学級通信を発行する意義である。果たして学級通信を発行する意義には、本当に教師視点の側面しかないのだろうか。

吉岡(2015)は、生徒の生活ノートへの記述をそのまま学級通信に掲載し発行することで、生徒同士の相互理解が促され、学級通信が友人関係づくりにも影響している可能性があることを示唆している⁽¹¹⁾。つまり、吉岡は言及こそしていないが、学級通信には、先に述べた「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」の他に、「子ども同士の信頼関係」の構築にも、その発行する意義があるといえるのではないだろうか。しかし、吉岡の研究はあくまでも、学級通信が友人関係づくりに影響することの可能性を示唆したに過ぎず、その影響の要因は明確ではない。

友人関係づくりについて、池島・松山(2014)は、教師からの賞賛チケットの発行と、子ども同士の肯定的なメッセージ交換の実施で、児童の承認感が上昇しただけでなく、学級内の肯定的な側面に視点を当てさせたところ、「学級全体で友だちとの関わり方も変えていこう」という意見が出るようになったことを報告している⁽¹²⁾。また、森岡ら(2011)は、「自他の良さを知ることで、他者を肯定的にみる目が養われ、お互いを認め合うことにつながった」ことを示唆しており、子ども同士の友人関係の変容には、児童が自他の良さを知ることが関係していることが推察される⁽¹³⁾。

しかし、吉岡(前掲)は、中学生を対象にした研究であり、子どもの相互理解が促されるものであれば、通信の内容は生活ノートの記述に限定されるものではない。また、池島・松山(前掲)は、学級通信について明らかにした研究ではなく、教師からの賞賛チケットの内容は児童個人にしか伝わらない。これらのことから、池島・松山(前掲)の賞賛チケットに代えて、学級通信の中で児童を称賛し、称賛の内容を学級全体に周知することでも、同等以上の効果が期待されると考えられる。

以上のことから、本研究では、小学校において、児童の良いところを紹介する学級通信を継続的に発行することで、児童の行動に変化が見られるようになり、友人関係にも良い効果が表れるようになることを明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

2.1 調査の対象

N県B市公立小学校第6学年C学級(男子18名・女子16名 計34人学級)

2.1.1 学級の選定理由

学級の選定理由は、以下の3点である。

①日常的に、子ども同士の肯定的なメッセージ交換を行っているため

子ども同士の肯定的なメッセージ交換の実施は、池島・松山(前掲)の先行研究からも、その有効性が示されている。この児童同士のメッセージ交換に加えて、学級通信を介して教師が児童を称賛することで、先行研究に対応したより確かな効果が測定できると考えた。

②研究以外で、学級通信がほとんど発行されていないため

今年度は学年の意向により、対象学級の担任は学級通信がほとんど発行できていない状況だった。学年だよりしか見ていなかった子ども達に学級通信を配付することで、その効果が明らかになると考えた。

③学級通信の内容を、読み上げながら配付する担任であるため

対象学級の担任は、例年は学級通信を配付する際、内容を声に出して読み上げて配付している。良さを伝える学級通信の内容を、全ての児童に確実に伝えることができると考えた。

2.2 調査期間

2016年10月20日～2016年12月8日

2.3 分析の方法

2.3.1 学級通信の分析

児童の良さを伝える学級通信がどのような内容で児童に紹介されているのかを把握するために、学級通信の分析を実施した。全8号の学級通信の内容を、山本・赤坂(前掲)を参考に筆者が作成した表1の内容カテゴリーをもとに分

類した⁽¹⁴⁾。以下が、その内容カテゴリーである。

表1 学級通信の内容カテゴリー(山本・赤坂2016を参考に筆者作成)

番号	記事の分類	表記
1	実現してほしい姿・目標, 教師の思い・願いなどの記述	目標・願い
2	学級の実態・出来事に関する記述	実態
3	来週の予定, 日程連絡, 提出物などに関する連絡の記述	予定
4	児童個人への称賛, 承認の記述	個人称賛承認
5	児童個人の活動・行動・貢献への価値付けの記述	個人貢献
6	学級全体への称賛, 承認への記述	学級称賛承認
7	学級全体の活動・行動・貢献への価値付けの記述	学級貢献
8	注意・指導に関する記述	注意・指導
9	学級通信に掲載された児童の記述	児童の記述
10	学級通信で名前が紹介された児童の人数	紹介された人数

2.3.2 児童への質問紙調査

児童の良さを伝える学級通信に対する児童の捉えを測定するために、栗原ら(2010)が開発した6領域学校適応感尺度「アセス」を一部参考に、5件法(あてはまる・ややあてはまる・どちらでもない・ややあてはまらない・あてはまらない)で、表2に示したようなアンケートを作成した⁽¹⁵⁾。特に、教師からの支援や教師との関係を表す「教師サポート」因子と、友人からの支援や友人関係を表す「友人サポート」因子の質問項目に着目した。以下が、自作アンケートの質問項目である。この内、質問項目③と質問項目⑩に関しては、その回答を選んだ理由を把握するため、記述欄を設定した。

表2 学級通信に関する自作アンケートの質問項目(栗原ら2010を参考に筆者作成)

①学級だよりで、私のことが紹介されると、うれしい
②学級だよりで、友だちのことが紹介されると、うれしい
③学級だよりで紹介された、いい行動は真似したいと思う
④学級だよりで紹介された、いい行動をする人が、増えてきたと感じる
⑤学級だよりで、私のことを紹介してほしいと感じる
⑥学級だよりを見ると、私のいいところに気づくことがある
⑦学級だよりを見ると、友だちのいいところに気づくことがある
⑧学級だよりを配る時は、担任の先生が、声に出して読む方がいい
⑨学級だよりが配られると、何が書いてあるか、わくわくする
⑩学級だよりは、配った方がいいと思う

2.3.3 担任へのインタビュー調査

児童の良さを伝える学級通信を発行することでの効果の実感を、担任へのインタビューにより測定した。

2.3.4 エピソード分析

終わりの会における、学級通信を配付する前後の児童の様子を観察することで、児童の良さを伝える学級通信の効果を検証した。

2.4 学級通信のレイアウト

本研究では、担任と打ち合わせを行い、次のような学級通信を発行した。

図1は、研究期間における第1号目の学級通信である。本研究では、児童の良さを伝える学級通信の発行を担任に依頼した。毎号の最後には、担任が名前を挙げて児童の良さを称賛し紹介するスペースを確保した。(図中、黒枠部分。)

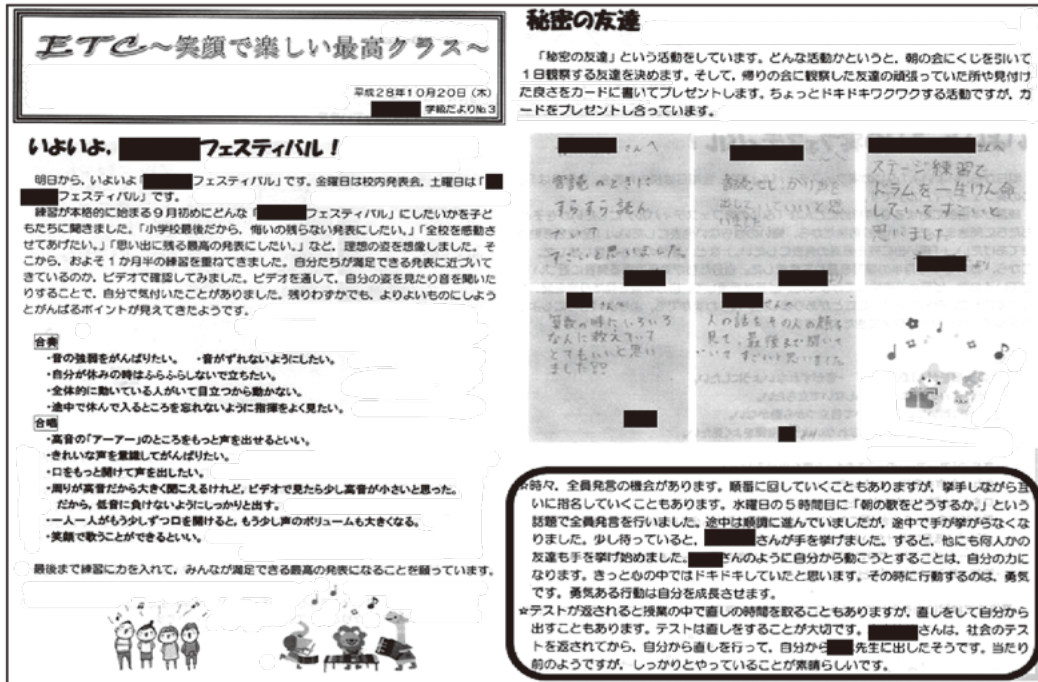


図 1 学級通信のレイアウト

3 結果と考察

3.1 児童への質問紙調査

アンケートの各質問項目に対して、肯定的な回答をした児童の多さを、中野ら(2012)が開発した「js-STAR」を用いて統計的に検定した⁽¹⁶⁾。表3がその結果である。ただし、選択肢のうち、「あてはまる」「ややあてはまる」を肯定的な回答、「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」を肯定的でない回答として分析を行った。

表 3 質問紙調査の分析結果 N=32

質問項目	肯定的	それ以外	直接確率計算
①学級だよりで、私のことが紹介されると、うれしい	12人	20人	ns
②学級だよりで、友だちのことが紹介されると、うれしい	13人	19人	ns
③学級だよりで紹介された、いい行動は真似したいと思う	18人	14人	ns
④学級だよりで紹介された、いい行動をする人が、増えてきたと感じる	19人	13人	ns
⑤学級だよりで、私のことを紹介してほしいと感じる	2人	30人	ns
⑥学級だよりを見ると、私のいいところに気づくことがある	6人	26人	ns
⑦学級だよりを見ると、友だちのいいところに気づくことがある	29人	3人	**
⑧学級だよりを配る時は、担任の先生が、声に出して読む方がいい	11人	20人	ns
⑨学級だよりが配られると、何が書いてあるか、わくわくする	11人	21人	ns
⑩学級だよりは、配った方がいいと思う	29人	3人	**

+p<.10 *p<.05 **p<.01

直接確率計算によると、「質問項目⑦：学級だよりを見ると、友だちのいいところに気づくことがある」と「質問項目⑩：学級だよりは、配った方がいいと思う」が有意水準1%で有意であった。10回の学級通信で児童が特に注目し、評価したことがこの2点だったと言える。この2点以外は、積極的な評価をしている児童が多いとは言えない。しかし、学級通信を配った方がいいと思う児童は多い。学級通信を児童が、これら2つの質問項目に注目した要因を考察する。

3.2 学級通信の分析

「質問項目⑦：学級だよりを見ると、友だちのいいところに気づくことがある」が有意であった要因を、全8号の

学級通信の分析から明らかにする。

3.2.1 学級通信のカテゴリー分析

表4は、表1で示した学級通信の内容カテゴリーをもとに、全8号の学級通信における、各内容カテゴリーの出現回数を分類し整理したものである。ただし、表中の空欄は、各号の通信において、適当な内容カテゴリーの出現がなかったことを意味する。

表4 学級通信の内容カテゴリーの出現回数

表記	第1号	第2号	第3号	第4号	第5号	第6号	第7号	第8号
目標・願い	1	1	2	1	1	1	2	2
実態	2		1	1	1	1	1	2
予定	1				1	1	1	
個人称賛承認	2	3	1		2	2		5
個人貢献	3	2			2	2		4
学級称賛承認	1	1	2	2	1	2	1	2
学級貢献		1	1		1	3	1	4
注意・指導							1	
児童の記述	19		7	2	3			
紹介された人数	7	13	9	2	9	6		12

児童の記述の紹介や、名前を挙げて紹介された児童の人数が、他のカテゴリーの出現回数と比較して多いことから、発行した学級通信は、児童の良さを継続的に伝えていたことが分かる。これらのことから、児童の良さを伝えるという教師の意図を反映した学級通信になっていたことがわかる。

3.2.2 学級通信の記述の分析

児童が友だちの良さに気付いたことを示すエピソードを、学級通信の内容と関連付けて考察する。以下は、第2号目の学級通信における児童への称賛の記述である。

第2号 学級通信より抜粋

☆帰りの会では、当番の仕事をきちんと終えるために当番タイムを2分ほど取ります。その中で、当番が終わっている人が配り物の手伝いをしてくれます。火曜日には、Aさん、Bさん、Cさんがさっと手伝いを始めてくれました。すきまに配っておくと量は減るのですが、なかなかそれも難しいときが多いです。だからこそ、気付いた友達が助けてくれることが助けになります。ありがとうございます。

自発的に配り物をしてくれた児童を担当が称賛し、感謝の意を伝えている。またこの時、担任が学級通信を読み上げるのを聞きながら、配り物かごの方へ目をやる児童が観察された。その結果、第5号目と第6号目の学級通信では、児童の行動に、次のような変化が見られた。

第5号 学級通信より抜粋

☆Dさん、Eさん、Bさん、Fさん、Aさんと配り物の手伝いをしてれています。私も気付かないうちにさっと手伝ってれています。あまりにも自然に行動していて、驚くばかりです。

第6号 学級通信より抜粋

☆最近、声を掛けることなく配り物やいろいろな手伝いをする人が増えています。Gさん、Hさん、Iさんが配り物を手伝っていたり、JさんやKさんが家庭科の教材を配ってくれていたり、自分から行動するのが当たり前になってきたように感じます。自ら気付き、行動する心が育ってきているのだと思います。

第5号目の学級通信では、配り物の手伝いをする児童が増えた様子が伝えられている。この日の担任インタビューでは、「学級だよりで紹介した、良い行動をする子ども達が増えてきているのを感じるんです」と担任が笑顔で話していた。また、第6号目の学級通信では、さらに多くの児童が配り物の手伝いをするようになった様子が伝えられている。

学級通信で紹介された良い行動が、他の児童に模倣されていることがわかる。こうした模倣行動の広がりから、学級通信がそのきっかけになっていることが推察される。学級通信が、見過ごされたり見逃されたりする児童のそうした行動を顕在化させる働きを担っているのではないだろうか。

3.3 学級通信発行による児童の変化

「質問項目⑩：学級だよりは、配った方がいいと思う」が有意であった要因を、児童の変化の分析から明らかにする。

3.3.1 児童アンケートの分析

「質問項目⑩：学級だよりは、配った方がいいと思う」の理由についての児童の記述をKJ法により分類した。これは、筆者が分類したものを、研究室の仲間に検討してもらうことで、児童の記述の分類項目として採用することとした。それぞれ、「保護者に関する記述」「仲間の良さに関する記述」「振り返りに関する記述」「記事の内容に関する記述」「その他」に分類できた。「仲間の良さに関する記述」についてはさらに、「気付きに関する記述」「気付きの中でも特に学年だよりとの比較に基づく記述」「行動の変容に関する記述」「配付時の交流に関する記述」に細分化できた。それらを各分類における記述例とともにまとめたものが、表5である。

表5 「学級だよりは、配った方がいいと思う」理由についての記述の分類

分類項目	記述例	
(a)保護者	お家の人にも学校での出来事を伝えられるから。	
(b)仲間の良さ	気付き	今まで知らなかった友達のいいところを知ることができるから。
	気付き (学年だよりとの比較)	学年だよりだと・・・だけど、学級だよりだと、「〇〇さんが△△をしていました」みたいな感じで一人一人のがんばりがわかるので良いと思います。
	行動の変容	良い行動をしようと努力するようになると思ったから。
	配付時の交流	みんなで声をかけあってやれるから。
(c)振り返り	クラスでどんなことをしたかとかをふり返れるから。	
(d)記事の内容	見るのが楽しいから。	
(e)その他	配ってうれしい人がいれば、「べつに」と思う人がいるから。	

さらに、表5に示した各分類別の人数をグラフに表したものが、次ページに示した図2である。黒枠で囲んだ分類は、「仲間の良さに関する記述」である。これを見ると、「仲間の良さに関する記述」をした児童の全体に占める人数は、29人中17人であり、全体の58.6%であることが分かる。つまり、「仲間の良さ」を知るきっかけが一つの、学級通信になっている児童が過半数であることが分かる。児童が、学級通信を歓迎する理由として、学級通信のもつ「仲間の良さ」を知る機能を挙げている。仲間のことを知りたいというニーズをもつ児童が、過半数以上いることがわかる。

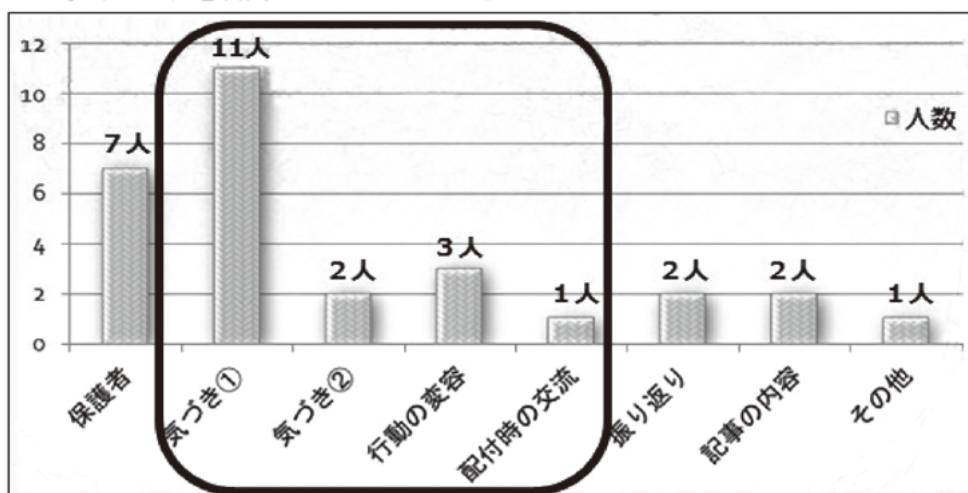


図2 アンケート記述の分類別の人数

3.3.2 エピソード分析

仲間の良さを伝える学級通信を、児童は何故必要とするのだろうか。エピソードをもとに学級通信と関連付けて考察する。

第5号 学級通信より抜粋

☆Jさんは、友達が仕事をしていると黒板消しや授業で使ったものの片付けなどを進んでやってくれます。友達に協力するやさしい姿がとても素晴らしいと感じました。

これは第5号目の学級通信である。友だちが仕事をしていると進んで協力する児童の姿が紹介されている。吉岡

(前掲)が、生徒同士の相互理解が促されると、友人関係が深まることを示唆しているように、児童の良さを伝える学級通信を媒体として児童同士の相互理解が促されたことで、児童が積極的に友だちと関わろうとしていることが推察される⁽¹⁷⁾。

また、終わりの会の観察では、次のような児童の姿が見られた。

- ・学級通信が配付されると、「名前載ってるじゃん」と声を掛け合う児童
- ・友だちと笑顔を見せながら、協力して配り物などの仕事をする児童

森岡ら(前掲)は、「自他の良さを知ることで、他者を肯定的にみる目が養われ、お互いを認め合うことにつながった」ことを示唆している⁽¹⁸⁾。学級通信を通して児童の良さを学級全体に紹介することで、友だちを肯定的に捉える視点が養われ、お互いを認め合えるようになり、児童相互の関わりが促進されたことが推察される。

さらに、学級の成長についての話し合いをした後の、第7号目の学級通信では、学級の成長についての児童の振り返りとして次のような学級の良さが紹介された。

第7号 学級通信より抜粋

【学級のよさ】

- ・明るい
- ・目標に向かってがんばる
- ・やるべきことをやる
- ・楽しい
- ・進んで行動している
- ・時間を守る
- ・男女で仲が良い
- ・いじめがない
- ・元気
- ・当番をしっかりとしている
- ・発言が増えてきた
- ・笑顔
- ・協力できる
- ・ふわふわ言葉がある
- ・褒め合える
- ・励まし合える
- ・人に体が向いている
- ・集中している
- ・拍手ができる
- ・けじめがある

池島・松山(前掲)は、学級内の肯定的な側面に視点を当てさせると、「学級全体で友だちとの関わり方も変えていこう」という意見が児童から出るようになったことを報告している⁽¹⁹⁾。「褒め合える」や「励まし合える」など、児童が出した多くの良さは、仲間との関わりなしでは感じられない成長であることが分かる。つまり、学級通信を通して学級の友だちの肯定的な側面を知り、児童の友だちとの関わり方が変容したことで、児童は学級の良さとして、友人関係の深まりを実感していることが推察される。

この学級では、児童同士の関係性の育成が進む中で、他者への関心が広がっていたのではないだろうか。そうした友人関係の変化から、児童のニーズに応える一つの道具として学級通信が求められていたと考えられる。

3.4 児童の良さを伝える学級通信の効果

以上をまとめると、「質問項目⑦：学級だよりを見ると、友だちのいいところに気づくことがある」と「質問項目⑩：学級だよりは、配った方がいいと思う」の肯定的回答が有意に支持された要因は、児童の行動の変容と友人関係の広がりや深まりにあったのではないだろうか。学級に貢献するような適切な行動が起こる中で、児童の良さを学級通信で伝えることで、児童は友だちの良さを知り、児童相互で認め合う関係が構築が促進され、さらに良い行動が学級内で増加し、友人関係の深まりが進んだと考えられる。児童の良さを伝える学級通信は、児童同士の良い関係が促進するきっかけとして有効に働く可能性が示された。

学級通信を発行する意義として、吉川(前掲)は、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」を挙げているが、本研究の成果と統合すると、学級通信、特に、児童の良さを伝える学級通信を発行する意義として、新たに「子ども同士の信頼関係」構築を促進する可能性が示唆された⁽²⁰⁾。

3.5 新たに見つかった学級通信の効果

対象学級の学級通信の表題は、「ETC～笑顔で楽しい最高クラス～」であった。これは、対象学級の学級目標と一致している。赤坂(2015)は、「学級目標は課題解決集団の育成というゴールにたどり着くための、子どもたちと共有する道標なのです」として、学級におけるさまざまな活動と連動して学級目標を活用することの重要性を述べている⁽²¹⁾。対象学級の担任は、学級通信を配付する際、折に触れて、学級目標を児童に伝えていた。その効果を検証していく。

以下に示したのは、11月4日の第3号目の学級通信である。修学旅行へ行く前日に、「どんな修学旅行にしたい？」というテーマで成長ノートに記述した、児童の決意が紹介されている。(下線含め、原文ママ。)

第3号 学級通信より抜粋

- ・私は、明日の修学旅行でみんなに迷惑をかけず悲しい思いをさせないようにしたいです。ETCにも近づけると思います。
- ・明日はとてもいい修学旅行にしたいです。みんなの絆が深まるようにしたいです。ETCをがんばりたいです。

学級目標を意識した児童の記述が、下線を引いて紹介されていることから、学級目標を大切なものとして捉えている、対象学級の担任の思いや願いを読み取ることができる。また、児童も学級目標に向かって、意識して取り組もうとしていることが分かる。

さらに、11月11日の席替えについての話し合いの場面では、児童が「くじで決めるか、自分たちで決めるか」を理由とともに学級の仲間に説明していた。「自分たちで決めて、あまり話したことがない人と近くになって、交流できたら良い」など、新たな友人関係を楽しみにしている児童も多く見られたが、ある児童が「どっちでも良い」と、学級目標を理由に意見を述べる場面があった。

11月11日 席替えについての話し合い

C：話したことがない人と関わるか、友だちと一緒にいるかっていうのを、判断ができるようになると思うので、ETCにちょっとは近づけるかな、と思うからです。

また、話し合いの最後に、担任は以下のように児童にフィードバックしていた。

11月11日 席替えについての話し合い

T：不安が1人でもいるんだったら、他の33人で、その人のことを助けてあげなきゃいけないわけだから、みんなでETCに向かうようにきっちりやればいいんだよね。

担任が学級目標を繰り返し何度も伝え続けることで、児童の意識の中に学級目標が価値付いていったことが推察される。

担任が、学級通信を通して、学級目標に基づいた担任の思いを、繰り返し継続的に児童にフィードバックしていたことが、以下に示す担任インタビューからも明らかとなった。

12月8日 担任インタビュー

質問：「学級だよりで、子どもの良いところを伝える良さはありますか？」

☆自分が子どもをどう見ているかが分かります。自分が大事にしている価値観がはっきりしてきます。求めている姿が分かります。学級だよりを書いていると、同じようなことを書いていたりして、ああ、自分はこれを大事にしている、そういった視点で見ているんだな、と分かります。

つまり、学級目標の達成に向かう子どもの育成を願って、担任は学級通信の中で、学級目標に向かう児童の姿を紹介し、その行動が学級全体に広まっていく様子を称賛していたことが推察される。

さらに、表2に示した児童への質問紙調査における「質問項目③：学級だよりで紹介された、いい行動は真似したいと思う」の理由の記述を見ると、「クラス」や「学校」を良くするために、良い行動を真似しようとしている児童が過半数であることが分かる。以下、児童の記述の一部を例示する。

- ・いい行動を真似すれば、教室にいい行動がどんどん増え、みんなが笑顔になれると思うから。
- ・いい行動をすればその行動をみんながまねして学級・学校がよくなるから。
- ・学級だよりで紹介する行動は、良い行動だから、良い行動をまねすれば、自分も良くなるし、クラスも良くなると思います。

つまり、「ETC」という言葉こそ出ていないが、児童が記述している内容は、学級目標の達成のための理由であることが分かる。赤坂(前掲)は、学級目標をもつことによって子ども集団がチームになるとし、さらに、「学級がチームとして機能するためには、そこに協力関係が必要となります。協力関係を構築するためには、『役割』と『良好な関係性』が必要となります」と述べている⁽²²⁾。学級通信を通して、「配り物をする」という児童の良さが紹介されたことで、学級目標を達成するために、児童は配り物をするという「役割」を、友だちと笑顔で「良好な関係性」を築きながら協力していたことが推察される。

以上述べてきたように、本学級においては、児童の良さを伝える学級通信を継続的に発行することで、児童の適切な行動が促され、それが再び、学級通信で紹介されることによって、さら多くの児童の適切な行動を促すという一連の流れが起こっていることが推察された。しかし、それは、学級目標などに象徴される教師の学級集団づくりへの願いの提示によって起こってきていたと考えられる。児童の良さを伝える学級通信が、児童同士の信頼関係構築の働きをするためには、ただそれを発行すればいいわけではなく、学級目標の提示や日常の語りかけなどを通した総合的な教師の願いを伝える働きかけがあつてのことだと考えるべきであろう。

4 全体考察

小学校において、日常的な子ども同士の肯定的なメッセージ交換の実施に加え、児童の良いところを紹介する学級

通信を発行することで、紹介された良い行動をする児童が学級内で顕著に増加した。具体的には、自発的に配り物をした児童を学級通信で称賛したところ、配り物をしようと行動する児童が日を追って増えていった。この行動の変容の要因として、以下の2点が考えられる。1つは、友だちの良い行動を知ったことで、児童相互の認め合う関係が構築されたことである。もう1つは、学級通信の中で担任からフィードバックされる学級目標が児童に価値付き、学級目標の達成に向かう意識が児童の中に構築されたことである。

また、そうした行動の変容により、クラスを良くするために行動しようとする児童が増える中で、協力して行動するなど、児童間の関わりが増加し、友人関係が深まったことが示唆された。

つまり、学級通信を発行する意義として、先行研究で言及されている「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」に加えて、「子ども同士の信頼関係」の構築の効果が示唆された。

5 今後の課題

課題は以下の2点である。1つは、今回の調査では、学級通信に対する児童の捉えを測定するためにアンケートを自作したが、5件法であったため、「どちらでもない」の回答が多かった。より確かな児童の捉えを測定するために、4件法にするなど、アンケートの改善が必要である。もう1つは、今回の調査では、学級通信を配付する終わりの会のみを観察したため、終わりの会以外の場面における、児童の様子を観察できなかった。授業場面や休み時間における児童の行動の変容も見えていく必要がある。

引用文献

- (1) 文部科学省：「小学校学習指導要領」, 2010
- (2) 国立教育政策研究所：「平成28年度全国学力・学習状況調査調査結果資料【全国版／小学校】」, 2016, <http://www.nier.go.jp/16chousakekkahoukoku/factsheet/16primary/>, 2017年1月21日閲覧
- (3) 成井信之：「望ましい学級経営の具現化につながる学級通信の一考察」, 奈良県立教育研究所研究紀要, pp4-10, 2011
- (4) 中井大介・庄司一子：「中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連」, 教育心理学研究, 第57集, pp49-61, 2009
- (5) 山本宏幸・赤坂真二：「生徒指導困難校における教師と生徒の信頼関係の構築に関する事例的研究」, 上越教育大学教職大学院研究紀要, 第3巻, pp11-23, 2016
- (6) 鈴木健二：「学級経営における学級通信の役割」, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 第2巻, pp103-111, 2012
- (7) 深見智一・津田順二：「単学級担任が抱える困難と課題(3)－学級通信による省察の試みを通して－」, 北海道教育大学紀要, 第66巻, pp347-363, 2015
- (8) 小倉真：「学級づくりにおける『教師理解(教師の語りかけ)』の果たす役割：学級通信と学級づくりとのかかわりについて」, 学校経営研究, 第14巻, pp75-86, 1989
- (9) 前掲(3)
- (10) 吉川成司：「コミュニティ・ネットワーキングとしての学級通信－開かれた学級づくりのために－」, 創価大学教育学部論集, 第55号, pp99-110, 2002
- (11) 吉岡三智子：「生徒の相互理解を進める手立てとしての学級通信の可能性：個を結び、一体感のある学級づくりをめざして」, 教育実践高度化専攻成果報告書抄録集, 第5巻, pp97-102, 2015
- (12) 池島徳大・松山康成：「学級における規範意識向上を目指した取り組みとその検討－“PBISプログラム”を活用した開発的生徒指導実践－」, 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」6, pp21-29, 2014
- (13) 森岡育子・近松正孝・渡辺良子・山本真利子：「ストレングスアプローチにおける小学校教師の学級雰囲気に対する認識の変化」, 久留米大学心理学研究, 第10号, pp72-76, 2011
- (14) 前掲(5)
- (15) 栗原慎二・井上弥：『アセスの使い方・活かし方』, ほんの森出版, 2010
- (16) 中野博之・田中敏：『フリーソフトJS-STARでかんたん統計データ分析』, 株式会社技術評論社, 2014
- (17) 前掲(11)
- (18) 前掲(13)
- (19) 前掲(12)
- (20) 前掲(10)
- (21) 赤坂真二：『最高のチームを育てる学級目標 作成マニュアル&活用アイデア』, 明治図書出版, 2015
- (22) 前掲(21)

A Case study on growing friendship through classroom communication

– Focusing on class communication to convey the goodness of children –

Atsushi KOITA* · Shinji AKASAKA**

ABSTRACT

In this research, it is shown that children's behavior will be seen to change by continuously issuing class communication that introduces the good points of the children at elementary school, and that good effect will be shown for friendship. It aimed to clarify. In addition to conducting positive message exchanges between children on a daily basis, by issuing class communication to introduce the good points of the children, children introduced a good behavior increased remarkably in the class. As a factor of transformation, it was suggested that the mutual recognition between children was established, and that the consciousness towards achieving the class goal was built in the student. In addition, it was suggested that the relationship between children increased, such as acting in cooperation, friendship deepened. It was suggested that the significance of issuing classroom communication has the effect of newly building "trust relationship between children".

* Giho Elementary school ** School Education